

## チェルヌィシェフスキーの歴史哲学 (Ⅱa)

武井勇四郎

1857年2月13日、『現代人』誌の編集長にして文芸評論家チェルヌィシェフスキーは前編集長H. A. ネクラソフに書簡を送って、自分の問題意識の転換を彼に知らせている、——論壇評でとりわけヴェルナツキーの新雑誌『経済指標』について書き述べるつもりでいます。何か生まのこのとに手をつけたいのです。残念なことに、何か別のこのとを書きたいときにレッシングに縛りつけられてしまっているのです。今となつては結末をつけずに投げだすわけにもまいりません。レッシングとクラブらのことはなんでも二年前までは結構よかったです。来月(No. 4)号でシュタイン(つまりプロシヤにおける農民解放とそれに類したこと)についてか、それとも鉄道について書くつもりでいます。つまり、目下布告された勅令による我國の道路の諸条件を説明することなのです。レッシングと手が切れたらただちに、もっと生まの事柄について絶えず書くことになるでしょう。でもレッシングを脇にほうりだすことは良くないことです。たしかに尚三つの論文があります、差当りそれらを読者は読んだりほめたりするでしょう。しかし、それでもこれは本質的にくだらぬことです。何か別のこのとをなるべく現代的に述べるのがもっと有益というものです、と(傍点——引用者)。この「生まのこのと」「別のこのとをなるべく現代的に」とは何を指しているのであろうか。チェルヌィシェフスキーはペテルブルグ帝大卒業後郷里サラトフのギムナジウムでロシア文学の教鞭をとりさらに幼年学校に勤務するかたわら博士号請求論文『芸術と現実との美学的関係』の執筆に専心して1853年の暮までに完成、母校に提出

した、一方その年の秋からネクラソフ主宰の『現代人』誌に参加、数々の書評をものし1855年からは本格的な文芸評論家として身を立てた。そしてこの書簡の頃までに『プーシキンの著作』(1855)、大作『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』(1855~56)、『ジョルジュ・サンドの生涯』(Histoire de ma vie. Paris 1854~56 露訳)、『バルザック』、『ヤコフⅡ世、ウィルヘルムⅢ世とアン女王治下のイギリス史物語』(コマーリーの露訳 1856)、『〈イスパニヤについて〉ポトキン氏』、『グラノスキー著作』、『〈県の記録〉シチェドリーオン』(1857)そしてこの書簡で触れられている浩瀚な論作『レッシング、彼の時代、生涯、活動』(1856~57)等々に健筆を揮ったのである。この期の彼の活動を一口で言えば文芸評論の祖父ペリンスキーの事業の継承である。そしてこの時期は丁度クリミヤ戦争のそれに当たっていたのである。先きの書簡のなかで述べられているように「二年前まで」は、つまり1855~56年初頭までは文芸評論や芸術哲学(美学)はロシアの社会的情勢とマッチしている「結構よい」主題であったのである。言ってみればチェルヌィシェフスキーの大作『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』はニコライⅠ世治下における記念碑的論作であって、これ自体がニコライⅠ世時代の終りを告げる、いわばゴーゴリ時代終焉を告げる論作であったわけである。ニコライⅠ世は先進国英仏の参戦によるクリミヤ戦争の敗色のなかで失意と絶望の故に1855年3月に自らの命を絶った、そして「血まみれのニコライ」にとって代って即位したのは、全ロシア人民の期待を荷った「解放皇帝」アレクサンドルⅡ世であった。チェルヌィシェフスキーが『レッシング、彼の時代、生涯、活動』を『現代人』誌に何回かにわたって連載していた時期は、丁度この時代の変り目であったのである。新皇帝はクリミヤ戦争の惨敗によって、また農奴農民のたび重なる叛乱・暴動・一揆におされて「上から」農民を「解放」することによってロシアの近代化を促進することを余儀なくされていた、彼の差当っての最大の課題は「上からの改革」による農奴解放宣言であった。『レッシング……』は、既にこのような情勢の変化にあって、時代の要求に

そぐわないものとなり、ひいてはチェルヌィシェフスキーの新しい問題意識にとっての手枷足枷となり、彼にとってなくもがなのものであったのである。先きの書簡で述べられた「生まのこと」「別のことをなるべく現代的に」とは、すなわち、差迫った農奴解放と結びついている、彼の言葉で言えば「農村諸関係の改造」の諸問題であり、とりわけ彼にとっての問題中の問題は、ロシアの近代化にさいしての<sup>オ</sup>フ<sup>シ</sup>チ<sup>ナ</sup>の農村共同体の存廃の問題であった。この問題のために従来の文芸評論家としてのチェルヌィシェフスキーは、急遽、社会評論家に転身せざるを得なかった。

クリミア戦争勃発10年前、すなわち1843年の春から冬にかけてプロシアの農業経済学者ハクストハウゼン男爵 (August Freiherr von Haxthausen 1792~1866) は、ニコライ I 世に許されてロシアの農業制度、村落生活の資料蒐集を行うためロシアの各地方を調査旅行した。既に彼は1830~38年にかけて全プロシアの農村を調査した際、そこに移住していたスラヴ種族の農村生活の特異性に気づき南スラヴ諸国の調査に乗りだし、ついに農奴制のロシアにその原型を見出して驚嘆したのである。言うまでもなく、これは土地の共同体的利用とそれにまわりつく共同体的生活慣行である。ハクストハウゼンはその実証的研究成果をロシアの助成金をえて最初の2巻を独仏語で1847年に発表し、特にロシアの農村共同体を叙述した3巻目は1852年に出版された、その書名は „Studien über die inneren Zustände, das Volksleben und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Russlands, (『ロシアの国内状態、国民生活、そして特に土地制度についての研究』) である。出版当初、外国語で書かれていて、しかもその露訳が禁止されていたことが手伝って、この外国人による注目すべき論著は一部の人を除いてあまり人目を惹かなかつた。それでも、ゲルツェンと彼とのつながりは深い、ドイツ語に堪能だったゲルツェンはロシア旅行中のハクストハウゼンと一面識をもっていた。1843年5月13日の彼の日記にこうある、——ハクストハウゼンと話す機会があつた、我国の百姓の生活、地主権力、地方警察と一般に支配について

の明晰な見解はおれを驚かした。彼は共同体 **общинность** を大昔から保持されてきた重要な要素と考えている、時代の要求に応じてそれを発展させる必要がある云々、と。1847年西欧に亡命し1848年の革命に身を投じ、その敗北を身をもって体験し、つづく49年の急速な反動化をまのあたりして頭が混乱し、目の前に深淵が開かれ足もとの大地が大きく崩れ去って行くのを感じたゲルツェンは、いわば、「向う岸から」別のヨーロッパを数年前に立去った故国「ロシア」に求めた。彼の西欧への幻滅は彼の眼を「ロシア」なる革命の聖地に向けさせたのである。丁度その時、ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』はゲルツェンをしてロシアの農村共同体に大きな期待をかけさせる結果に導いた。彼は論文“La Russie, (1849) のなかでハクストハウゼンに触れてこう述べている、——事実、ハクストハウゼンの言葉によれば、農村共同体はロシアでは万事をなしている。男爵の意見によれば、その中に過去のロシアの鍵があり、かつ未来のロシアの萌芽が、ロシアの国家の生きたモナドがある。「各々の農村共同体——とハクストハウゼンは言う——はロシアにおいては小共和国であり、自らの内政を独自に管理し、私的所有も、プロレタリアートもしらない。そしてとうの昔に社会主義ウトピーの一部は完成せる事実の段階にまで昇りつめた。それと別風にはここでは生活できない。それと別風にはここでは生活できもしなかった。」私はハクストハウゼンの意見を完全に分ちもつものであるが、しかし、農村共同体はいまだロシアの万事ではないと思う、と。絶望の深淵にあったゲルツェンはこのロシアの農業経済学者の保守的無批判的態度を非難するものの、既に西欧で死滅してしまった農村共同体のもつ共産主義的原理の彼による把握には舌を巻かざるを得なかった。『ロシアの国内状態……』はゲルツェンの《ロシア社会主義》の誕生に一役買ったのである。ゲルツェンは1849年から50年にわたる『ロシア』『ロシアにおける革命思想の発達について』『ロシア民族と社会主義』等の著作の中でロシア社会主義を提唱し、「向う岸から」祖国ロシアの思惟する先進的貴族に奮起するよう呼びかけたのである。ここではゲル



ツェンの《ロシア社会主義》の性格についての描写は差し控えよう。むしろ興味ある点は、ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』がゲルツェン以外のロシア本土の先進的思想家にいかなる反響を示めたかである。

1856年、歴史家グラノフスキーの門下生、ヘーゲル法哲学をかざした西欧派の自由主義者のチャンピオン B. H. チチェリン (1828~1904) は、西欧派の機関誌『ロシア通報』に『ロシアにおける農村共同体の史的発展概説』を発表した。彼はこの年からチェルヌィシエフスキーの好敵手となったなかなかの論客であり、チェルヌィシエフスキーによって後年『評論家としてのチチェリン氏』(1859)で彼の改良主義的歴史観が仮借なきまでに論難された社会評論家である。チチェリンが先きの論考を書ききっかけをつくったのはハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』であった。またロシアの保守的な俗流経済学者 J. B. テンゴボルスキーは、『ロシアの国内状態……』を下敷にして“Etudes sur les forces productives de la Russie” (1852~55) をパリで発表、後年『経済指標』誌で改革=自由主義的経済学の論陣を張った И. В. ヴェルナツキーはこれをただちに露訳し、それを『ロシアの生産力について』(1854~58)の表題でもってロシアの知識人に紹介し、ロシアの近代化への自由主義的布石を敷いた。つづいてこのヴェルナツキー(1821~1884)は1857年初めに『経済指標』誌(1857~64)を興し自ら論文『土地所有について』を連載し、『現代人』誌との論戦の火蓋を切った。彼はこの誌の他に『エコノミスト』誌(1858~64)を主宰し、かつ『需要論概論』(1857)、『政治経済学史概説』(1857)の論作をものして改革=自由主義路線を延長した。またストルーコフは『経済指標』誌に『成功する農村経済の最重要諸条件の叙述試論』(1857)を、バプストは『理論と実践』(1857)を載せて、共同体問題の自由主義的解決を迫った。他方、共同体問題の論争はスラヴ派の『ロシア対談』と西欧派の『ロシア通報』との間にも1856年初頭から起り、西欧派チチェリンはスラヴ派サマリノと論戦をたたかわした。かくして、農村共同体問題はスラヴ派と西欧派、自由主義者と急進的農民主義者との逼迫した農奴解

放をめぐる焦眉の問題となり、その論戦は1857年初頭から、まさにたけなわの観を呈し解放後も続くのである。

こういうわけで、ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』(1847～52)は出版10年後、クリミア戦争惨敗のロシアに大きな波紋を惹き起す一石となったのである。ここで彼らの農村共同体観とそれらの対比を論及することは続論に譲って、チェルヌィシェフスキーがクリミア戦争とそれがもたらしたロシアの経済的・社会的変化をどう認識して、先述した文芸評論家から社会評論家への転身を行い、問題の1857年の『現代人』誌4・5号の論壇評を書くに至ったかをまず調べてみよう。そうした上でこの論壇評の内容分析に入ろう。

チェルヌィシェフスキーは在学当時から噂に流れていたロシアの対外戦争にたいして異常な関心を示し、その内容を1850年2月から1856年1月迄に出した両親宛の10数通の書簡で両親に知らせている。クリミア戦争の流言はその勃発の3年ほど前から聖ペテルブルグの町に飛んでいた。1850年2月21日付の彼の書簡にはこうある、——次の春には戦争があるという噂はますます強まっています。いまのところ思いますに、プロシアとの戦争を準備していることは疑いありません。……トルコと戦うのなら、これはあり得ることです。……でも二つの戦争が同時に起ることはありません、と。1853年に入るとロシアの相手はトルコとイギリスであるとの見方に変わり、クリミア戦開始三ヶ月前の書簡では、戦争は対トルコ戦から対イギリス戦にまで至ると書かれているが、チェルヌィシェフスキー自身は戦争は勃発しないだろうと考えてかなり楽観視していた。しかし彼の予想を裏切ってニコライI世は1853年10月4日トルコ領内のギリシア正教徒保護を口実に対トルコ戦を布告し南下政策に乗り出した。チェルヌィシェフスキーにはこの戦争の目的・意図はほとんど意識されていない。丁度この頃彼は博士号請求論文に専心していて事件究明の余裕がなかったことであろう。したがって、楽観的見地が目立つ、1851年10月25日付の書簡にはこうある、——イギリスが参戦するこ

とは一分の疑いもありません。事態ははるかに重大となるでしょう。でもすべて平和的方法で十分うまく和解できるのではないのでしょうか、というのもロシアもイギリスもとことんまでお互いに戦うことは望まないからです。そして実際、我国はトルコと終戦を迎えます、と。イギリスとフランスはロシアの南下によって彼らの東アジアへの進路が絶たれるのを恐れて1854年3月にロシアに参戦しトルコの後押し積極策に出た。11ヶ月も続いたセヴァストポリ攻防戦中も、情報不足も手伝ってのことか彼は楽観視をすてていない。1855年5月24日付の書簡で、新聞でイギリス人がクロンシュタットに接近していると伝えられています。……御存知のように彼らが本気でクロンシュタットに結集するとは考えられません。自分の艦隊を自重しますから。うまく行ったとしてもその艦隊はほとんど全滅するでしょう、と自国の軍事力を過信している。そして最後に、1856年3月18日の屈辱的なパリ和平条約にアレクサンドルⅡ世が調印する2ヶ月前の書簡(1856, 1, 3)にはこう書かれている、——当地では先月、来る和平の噂が流れました、今その噂は時期早尚のものとしてたち消えました。戦争当事国は皆、和平を望んでいます。でも、和平のために彼らの要求に大幅に譲歩するほどの段階にまで、戦争はいまだ疲れを見せていません。我国のいたるところで戦争継続のために、前にも増して広範囲の準備がなされています。造兵廠では昼夜兼行で大砲を作っています。武器工場では小銃など準備しています。陸軍省の官吏の信頼に足る言葉によれば、今、我国の部隊は、250万人に達しています。わけでも皇帝〔アレクサンドルⅡ世〕は、実際、国民に関する内政改善に取り組んでいます。どの人も一致して、彼の行政改善への誠意のある賢明な努力を認めています。そしてどの人も彼への愛着と感謝の念で一致しています。またどの人も皇帝と皇后の高邁な英智と善良な企図に敬意を表しています。皇后の皇帝へ及ぼす影響から人々はすべて善きものを期待しています。皇帝、皇后とともに一般的尊敬を受けている人は、善への堅固な性格と期待を大きく担ったコンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公です。戦争にも拘らず、一般

に新年を迎えているに際して、どの人もロシアのために多くの善きことを祈っているのです。戦争自体は多くの点で国家にとって有益であり、多くの改善の原因に役立ちます。願くばこうあらんことを、と。チェルヌィシエフスキーはこの時点ではこの戦争がまだロシアの惨敗であるとは微塵も思っていない。彼はこの頃、戦争は、この書簡に現われているように「多くの点で国家〔祖国〕にとって有益であり、多くの改善の原因に役立つ」と見ているが、これは後に示される彼の戦争観とつながっている。彼は『現代人』誌(1857 No. 4)の論壇評で、戦争のもつ矛盾性について、彼によれば自国の国境を堅持するために人民によって遂行される戦争は理性的でかつ有益なのであり、その他すべての戦争はいかなる成果があっても人民大衆の福祉にとって有害である。クリミヤ戦争は、1812年のナポレオン戦争と同じく祖国を守る点では「理性的でかつ有益」であると評価される。ところで、興味深いことに後進国ロシアは先進諸国との戦争でそのつど近代化を余儀なくされてきたという事である、つまり、ナポレオン戦争は敗北を喫しはしなかったが、当時の青年将校が西欧の文物に触れて国民意識に目覚め10数年後には立憲共和国樹立をめざしたデカプリストを輩出した、同じようにクリミヤ戦争は数年後に農奴解放によるロシアの近代化を余儀なくさせたのである。日露戦争や第1次世界大戦については語るまい。たしかにクリミヤ戦争は、チェルヌィシエフスキーの述べるように、ロシアにとって「多くの改善の原因」として役立つ契機をつくりだした。しかし後年、彼が『宛名なき手紙』(1862)の第二書簡で次のように述べていることは非常に注目すべきことで念頭においておく必要があろう、——クリミヤ戦争は農民解放の必要性をつくりだした。……軍事的敗北は社会のすべての階層にたいして、戦争前まで生きのびて来た事物の秩序のもつ破産性を白日の下にさらした、と(傍点一引用者)。チェルヌィシエフスキーのこのクリミヤ戦争の歴史的意義の認識はまことに正しい。デカプリストの乱から30年間闇の王国ロシアに支配した「忘れがたき」「血まみれのニコライ I 世」の支配体制の破産性を曝露したのは正しくクリミヤ戦争

の惨敗であり、ニコライ I 世の自殺はこの体制を如実に象徴しているものである。他方、ニコライ I 世の後継者として即位したアレクサンドル II 世は思慮深い絵明な、チェルヌィシェフスキーの言葉で表現すれば「いい調子」の皇帝であり、「闇の王国」に改革によって西欧的光明をもたらす「解放」皇帝と映った、否、そうあらざるを得ないほどロシアの経済的活動が急速に躍動し始めていた。これに対するチェルヌィシェフスキーの洞察力は深かった。彼は1857年、ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』についての論文の冒頭で、クリミア戦争終結と同時に始ったロシアの経済的近代化について次のように述べている、——クリミア戦争の終結と同時にロシアは以前にもまして西欧の一般的経済運動に活発に参加し始め、ロシアの産業活動は急速に強化し出した、ロシアの国民資本——道徳的および物質的資本——はその沈滞した無為から脱したのである。外国資本は我国ロシアにおいて儲かる危険のない場所を見出し始め、一部は既に大量に我国に持込まれ、一部は急速に大量に持込まれる準備がととのっている。この運動の結末がどうなるか疑いの余地ないところである。従来、我国ロシアの経済生産の大部分は、ほとんど家父長制の手段と方法によって行なわれて来た。農耕については言を待つまでもない、このことについて真実を証言しておくのも無駄であるまい。つまりロシアの国内商業の大部分と原料加工業の著しい部分は、19世紀というよりは17世紀の秩序でなされていたのである。これは尚数年は続くであろう。産業への資本投下によって生産物が多量に増大するばかりか、産業秩序そのものまで変化するのである。……ロシアは経済生産に諸資本が投下される時期の経済発展段階に入ったのである。生産諸階級の活動の性格と彼らの生活様式そのものが、このために大きな変化を蒙ること必至である。荷籠や種々様々な家父長制的搬船に替って、汽関車や汽船のいくつかを所有するであろう……。今日まで商業を圧迫して来た恐しい不便と不正の除去と相俟って、他の西欧人に劣らず、我ロシア人民持前の公正と企業心が現われるであろう。しかし、何より顕著となるものは、我国ロシアの底力を



成し、かつ、我国ロシア人民の大多数の生存手段となっている経済活動の変化であろう。つまり、農業におけるそれであろう、と。クリミア戦争を契機としてロシアの経済活動が西欧資本主義先進国におけると同じ色彩を持ち始めているというチェルヌィシェフスキーのこの正しい歴史の現実的認識は、文芸評論家としての彼を一挙に社会経済評論家に轉身せしめる大きな力となって作用したのである。彼は、もはや自分が沈滞のニコライの治下に立つのではなく、近代化へ躍動するアレクサンドルの治下にあることを強く意識した、そして時代の要請に応えるべく、まず問題中の問題である農業問題を処理することを自分の任務に課したのである。既に、先述した如く、ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』に刺激されていくつかの共同体論が相次いで現われ、ヴェルナツキーは『経済指標』誌を1857年に創刊し農奴解放に向けての自由主義=改革路線を敷き始めていた、そのためチェルヌィシェフスキーは下層階級=勤労農民の利害を擁護する自らの路線を、『経済指標』に対峙せしめて敷くことを痛感するを余儀なくされた。先にとりあげた彼のネクラソフへの書簡は、従来の文芸評論中心の『現代人』誌を政治・社会・経済評論のラジカルな機関誌にする意図の宣言であったわけである。『現代人』誌は農業問題をラジカルに解決する革命的民主主義の陣営の機関誌として自由主義派の『経済指標』誌に対決を迫った。時も時、文芸批評の奇才ドブロリユーボフの出現はチェルヌィシェフスキーの轉身への願ってもない条件をつくりだしたのである。これまでベリンスキーの事業を継承していたチェルヌィシェフスキーは1856年7月に彼ドブロリユーボフと知己となり、若干20才の青年の中に自分以上の文才と批評精神を見出し、『現代人』誌の文芸欄を全部彼に明け渡して、自らは「生まのこと」「別のことをなるべく現代的に」書く決心がついたのである。ドブロリユーボフは、こうも言えるなら、文芸評論家チェルヌィシェフスキーのまたとない分身であった。事実、少壮ドブロリユーボフはチェルヌィシェフスキーの期待以上の仕事を短い期間、丁度後者の第3期の活動期間(1857~62)に成し終え、短い生涯を

文芸評論と教育論に向けて燃え尽してしまったのである。若干25才で生涯を閉じたドブロリユーボフの文芸評論は枚挙に暇間ない、なにしろ『ドブロリユーボフ全集』(1961~64年版)の中、2巻から7巻までがこの期に当たるものなのである。もしドブロリユーボフなる人物がこの期に登場しなかったら、チェルヌィシエフスキーがかくも社会評論に身を入れることが可能であったかを疑とするものであり、そして『現代人』誌がすぐれた総合雑誌として各部門にわたって全面的に自由主義派とイデオロギー闘争を挑むこともできたかを疑とするものである。

ともあれ、ロシアの近代化の要請とドブロリユーボフの出現とによって、文芸評論家チェルヌィシエフスキーは、急遽、脱皮して社会評論家のチェルヌィシエフスキーに早変わりした。その第一作が1857年の『現代人』誌4・5号の論壇評であった。これは論壇評というよりは、むしろ彼の農民社会主義とその歴史哲学を吐露した論文といえるもので、いわば見事に組み立てられたその屋台の骨組である、彼のその後の見地の展開はこの骨組の哲学的・経済学的・歴史学的肉付けにすぎぬと言っても大過ない。それほどどの原型をなす無視できない論文なのである。チェルヌィシエフスキーは、学生時代、既にプロレタリアートと貧困の根絶のためにはテロリズムをも辞さないというラジカルな社会主義者になっていたが、しかし、この転身による第一作のものすまでは、下層階級へのヒューマニズムの見地は文芸評論活動に貫流こそすれ社会主義の見地は表面に現われ出ていなかった。ところが、この第一作において、伏流中に水量を増した社会主義観は一挙に湧出したのである。そしてこの社会主義観は、学生時代におけるように理論的に肉付けの薄い心情的ラジカリズムと異なって、とりわけ経済学の知識とベンサム功利論の焼直しによって固められた理論的性格を強くしている。したがってこの論壇評は彼の農民社会主義の誕生をしるす注目すべき論文とみてよいのである。この論壇評の内容分析にとりかかろう。

まず指摘しておかなければならないことはフランスの俗流経済学のロシア

への影響である。フランスの20~30年代の社会思想、経済思想、歴史思想は、何らかの意味合でロシアの40~50年代の先進的思想家に甚大な影響を与えている、このことは見逃しえない事である。前論文で既述したように王政復古期のギゾーの歴史学と20年代のフランス空想社会主義は、チェルヌィシェフスキーに大きな影を落した。それに対して、スミスらの古典経済学は4・50年後にセイ、バスタアらによって俗流化を受けながら、コレジ・ド・フランスを中心にしてフランスの一大経済思潮となるが、これがロシアの自由主義的経済学者に反響し、甚大な影響を及ぼしたのである。既に学生チェルヌィシェフスキーもセイの露訳『政治経済学教理問答』(1833)、セイの後任者ロシイの『政治経済学講義』(1830)を、そして若干色合がことなるがシモンディの『新経済学原理』(1827)などを手にして読んでいた、しかし彼にはポジティブな経済思想として決定的影響を与えていない。『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』(1856)のなかで、彼はこの流派を「魂の抜殻みたいなうんざりする経済学の学説」とし、この学説の対蹠物としてフーリエの「国民福祉の新しい理論」が誕生したのだとしている。ところが、セイ、バスタア、ロシイ(1787~184)、ミシェル・シュバリエ(1806~1876)、ジョセフ・ガルニエ(1813~1881)らの *laissez faire, laissez passer* の理論は、ロシアのブルジョワ化を目差していた『経済指標』誌のヴェルナツキーの論陣にとっての標榜すべき理論であった。それもそのはず、J・B・セイ(1767~1832)が『政治経済学概論』(1803)や『実践政治経済学講義』(1828~29)の主要著作で述べていた主要点が、産業(労働)、資本、自然の三つの相互協力的な生産的サービスによって生産が行なわれて、その報酬として賃金、利子(利潤)、地代がその提供者に帰するというものであり、そのことによってリカードの言う賃金と利潤および地代との敵対関係を解消し、かつ労働価値説を否定して生産三要素説を徹底的に肯定していた点にあったからである。セイは資本主義の矛盾は *laissez faire, laissez passer* の不徹底によるものとみ、これを貫徹させれば労働者、資本家、地主の対立関係は解消し、

調和に至るという楽観論に終始したが、これはいわば資本主義の弁護論にほかならない。つづくバスチア (1801~50) はどうであったか。彼はフランス王政復古期のなかにおいて小ブルジョワジーの代弁者を勤め、『経済学的詭弁』(1847) と『経済的調和』(1850) の主要著作でセイの見地を更に押し進めて古典経済学の俗流化を強めた。彼によれば、資本主義と *laissez faire*, *laissez passer* はいわば自然的秩序の如きもので、資本と労働は予定調和に支配されている。この如きフランス俗流経済学の見地は、後進国ロシアが封建的な土地所有関係を捨てて、つまり資本主義的生産の障害となっている残存する農村共同体を廃棄して、生産三要素を明確にすることで企業心を起させ、尚かつ自由放任主義によって生産性を高めて経済的に近代化を企る、というロシアの自由主義経済学者にはうってつけの見地となったのである。ヴェルナツキー一派は、チェルヌィシエフスキーの特徴づけによると、それ自体薄ぺらで古臭い、枯死した「エセ」学派セイ、バスチアの、ロシアの後継者にして跪拜者であった。彼によると、この学派は次の点ですでに論破され済みで、破産宣告を受けている、つまり無制限競争が独占に至ることの認識の欠如、需要と供給の盲目的な、非理性的原理への依拠、人間の自然的諸要求と経済的諸力の組織との不照応、その諸力の理性的コントロールの欠如等である。後に彼は自らの「勤労者の理論」に対置させて、この学派の経済学を「資本家の理論」であると、一口で特徴づけたのである。

チェルヌィシエフスキーによるロシアの俗流経済学者ヴェルナツキーの近代化路線の論破は、後者が跪拜していたセイ、バスチアの時代遅れの経済学の論破であり、とりも直さずこのことはその経済学が拠って立っていたフランス資本主義、ひいては資本主義一般の論破とそれに対する批判であった。この批判の強度と深さこそがチェルヌィシエフスキーの農民社会主義誕生の決定的契機の一つなのである。およそフーリエにしろ、サン=シモンにしろ、ロバート・オウエンにしろ、彼らのウトピーは商業主義ないし産業資本主義批判の上に建られた理想社会像であるが、前資本主義的ロシアのチェ

ルヌィシェフスキーにあっても西欧資本主義批判が彼のウトピーの不可欠にして不可分の要素となっており、こうも表現してよいのなら、彼の農民社会主義のウトピーは、西欧資本主義制度批判を横糸に、ロシアの専制・農奴制批判を縦糸に織りなされて出来上った一つの特異なスラヴ模様の織物である。

1857年の『現代人』誌4・5号の論壇評で展じられた西欧資本主義批判の主旨はこうである。西欧先進資本主義国の歴史的本質は、各個人の私的権利の保証、完全な私的所有権、個々人の法的独立および不可侵、国家的制度によるそれらの保証である、——そしてこれらがまた求める理想である。しかし、これらの私的権利の完全な保証は、わけでも経済部門にあっては個々人の完全なる排他的権利による営利追求になり、行きつく果は *laissez faire*, *laissez passer* (無制限競争) による私利・致富の非人間的活動である。無制限競争の原理は弱肉強食であり、労働を資本の犠牲下におき土地なしのプロレタリアートの産出に導く。フランスの小作人は、私的所有のため土地改良と収穫増大のための強力な手段が欠け零落して行く、他方イギリスにあっては農業の資本主義的経営方式によって少数の資本家と経営者に比して圧倒的多数の水呑百姓の出現となり、また工業生産においても1人の資本家に比して100人の労働者を産みだす。農業と工業における無制限競争は生産規模の拡大にともなう生産価格の低下によって大資本家による小資本家の圧倒を導き出す、その結果、後者は日雇プロレタリアに転落し、よって労働者間における競争をもたらし労働賃金の低下を惹き起す。かくして無制限競争の宿命的法則にしたがって一握りの富者に巨万の富が集中し、大多数の労働者は社会的窮乏に陥る。労働が資本に隷属する一方、富者には奢侈という自然的欲求を超えた人工的案出の消費が増大する。西欧諸国のすべての労働は利己的搾取者の抑圧の下で行なわれる、換言すれば西欧諸国の経済活動は *l'exploitation de l'homme par l'homme* [人間による人間の搾取] と銘うたれたシステムによって行なわれている。以上のことをチェルヌィシェフスキーの単端な言葉で言えば、西欧資本主義国は決して「地上の楽園」ではなく、



それどころか「プロレタリアートの潰瘍」を生みだす煉獄なのである。そして彼によれば西欧資本主義制度のいきついた「理想」の結末たるものは、不可避的な「プロレタリアートの潰瘍」の拡大による新たな理念、ウトピーの産出であった。

では、資本主義的利己主義ないしは「商業の自由」「資本投下の自由」「価格決定の自由」「競争の自由」の理念の破綻による必然的帰結としてのウトピーとは何であろうか。チェルヌィシエフスキーは当時のきびしい検閲を考慮して、しばしば遠廻しの比喩的表現を用いざるを得なかったので、社会主義思想のことを「新たな理念」とか「ウトピー」とかと表現した。彼が、西欧諸国で既にこのウトピーに入っていると指摘していることから、また彼が連合団体(союз)とか組合アソシエーションの原理(принцип ассоциации)という概念を用いていることから推して、このウトピーとは明らかにフーリエやロバート・オウエンあるいはもっと下って1848年の社会主義者ルイ=ブランやブルードンの社会主義思想を指していることは間違いない。また彼自身、「ウトピー」なる語を空理空論の、机上の想像になる現実離れた空想や幻想という意に解していないのである、というのはこう書いているからである、——近視眼の人々ないし時代遅れの人々、ないしは利己的な人々が、経済的發展でさらに進展して行く西欧諸人民の経済生活の中へ、組合の原理を導入せんとする法的正当性、論理的道理性と歴史的必然性を認める人々をしてウトピストと呼ぶのは、驚くにあたらない。ある国でウトピーであると思われるものは、他の国では事実として存在する、と。(「他の国で事実として存在する」という句は後述しよう。)彼によれば、ウトピーの基本思想は同胞体(братство)、組合の理念であって、一般的に言えば、共通の利害をもったすべての人々が最も有利な生産と生産された価値(ценность)の経済的利用のために、自然の諸力と科学の諸手段を共同で利用する社会組織の理念である。その一般的志向は、私的所有以前に行なわれていた志向への復帰、その志向の自然的延長、その拡大および補完である。農業にあっては土地の共同

体的利用と農作物の共同体的消費、工業（産業）にあつては生産物（資本も含む）の勤労人民による組合的生産と消費である。この社会組織の特長は構成員の連合、<sup>ソリダリティー</sup> 団 結、類的団体 **родовой союз**、<sup>アソシエーション</sup> 組 合（オウエンやフーリエの構想していた2000名近くのコミュニティー）であつて、彼はこの社会組織（秩序）に強く経済的生産と消費の性格を付与した。というのは、彼は西欧の諸国における法的保証では人民の物質的福祉は保証されないとしてこう述べている、——人間は抽象的な法的人格ではなく、むしろ生身の存在であり、その生活と幸福において物質的側面（経済的生活様式）が大きな重要性をもっているものであることを忘れるべきではない。したがつて、もし彼の幸福のために彼の法的権利が保証されなければならないとするなら、彼の物質的側面の保証も少なからず必要なのである。事実、法的権利はこの後者の条件の遂行によってのみ保証されるのである。何故ならば、生存の物質的手段に依存する人間は、たとえ法の文字によって彼の独立性が宣言されていても、事実においては独立した人間は存在しえないからである。ある人口密度において、そして経済諸関係のある発展段階（良い交通網、いきとどいた商業、機械生産様式などの出現）において、物質的富は、生産者が労働と消費のために経済的に統一してのみ、はじめて人口大衆の手にとどくものとなり得るのである、と。フーリエは18世紀啓蒙主義哲学者のいう「理性」がフランス革命を実現したが、それによって出来た近代社会なるものはスミスの経済的自由放任による悪の華としての「文明」社会にはかならないのだと批判した。ルイ=ブランは啓蒙主義とフランス革命を評して言うには、18世紀の思想家は特に個人の権利に関心を寄せ、社会的権利には目もくれなかった。啓蒙の世紀は個々人のなかに自由を見出し、個々人の能力の自由な利用のなかに幸福と栄誉を見出した。そしてフランス革命はブルジョワジーに活動の自由をもたらし、プロレタリアートに無権利と非庇護を余儀なくした。この革命によって創りだされた社会秩序は、私利私欲の孤立した個人と彼らの同志討ちの源泉となり、社会性は私利私欲の原理に駆りたてられた個人の

集合と化した。チュルヌィシユフスキーに濃い影を落したフーリエとルイ＝ブランの共通項は、近代ブルジョワジーがつくった法的平等なるものが経済的不平等によって空洞化し、個々バラバラの私利私欲の人間をうみだしたということである。フーリエとオウエンの描いた小社会のコミュニティやファランジュはまず経済的平等を建前にしている共同体成員の協働、連合、団結であった。チュルヌィシユフスキーも共同体の本質を経済的視点から考察し、その特徴は私的所有権の全廃による共同体的所有（土地、全資本）、協働による生産性の高揚、一般的利益と個人的利益の統一、生産物の平等的分配・消費による物質的福祉の保証、奢侈品生産よりは日用必需品生産の優位、所有者＝生産者＝受益者の無階級コミュニティであった。彼はこのような共同体を一口で同胞体 *братство* (*брат · ство* ←→ *brother · hood* 元来は宗教団体 *религиозная община* であった) なるカテゴリーで表現している。彼はこのカテゴリーを60年代に入っても用いているが、彼の農民社会主義にとって特徴的なカテゴリーである、オプシチナ *община* の単なる土地所有関係だけに尽きるものでなく、文字通り兄弟の如き親密な人間関係、打算や計算抜きの類的関係や友愛的慣習をも含む *Gemeinwesen* が想定されている。彼は同胞体において「人格の発展にとっての出来得る限り可能な余地」が開らかれているとするが、それにはまず法律の文字上の平等でなく物質的生活様式、とりわけ経済的關係における平等が先決であるとし、搾取と抑圧のない、生産三要素による階級分裂のない「所有者＝生産者＝受益者」の共同体社会を構想していたのである。

このように彼は「絶えず拡大し行くプロレタリアートの潰瘍」を産みだす西欧資本主義制度に対するに、ロシアの農村共同体を母体とした同胞体をもってし、それを人類歴史の必然的帰結と見たのである、が、しかし、西欧諸国民がこの新たな理念の同胞体を実現することが非常に困難としたのである。何故ならば、西欧諸民族がこのすばらしい秩序を導入するにはあまりにも私人の法的権利が無制限に拡大されすぎているからである、よって私的権

利を制限することや相互に権利を譲歩することが国民全体にとって有益であることに気付きえないからである。もし導入するとすれば、従来の諸関係全体を犠牲にするという非常に厄介な問題をかかえることになり、それにはまず第一に西欧の巨大な無知なる大衆がはまりこんでいる私的所有の慣行の弊害を悟らせ、新しい理念が従来の慣行にまさるものであることを彼ら大衆に強く吹きこむ必要がある。何よりも人民の再教育が不可欠である。しかしこれには大変な時間とエネルギー、大変な苦悩と努力と消耗が要求される。チェルヌィシェフスキーは現在の西欧が新しい理念を実現する場合は「何世紀もの苦難な試煉」を要すると考えた。この結論の導出にはロバート・オウエンのコミュニティ実験やフーリエ、コンシデランのファランステールの失敗を計算に入れていたであろう、また1848～49年の西欧の革命とその敗北に続く反動化を念頭においていたであろう。つまり彼は西欧諸国民には私的所有の「慣行」のために、差当っては土台無理であるとしたのである。彼は「慣行」を重視した、むしろ過大視した。彼によれば新しい秩序の導入は専ら経済的關係の、とりわけ土地所有の形式にたいする「慣行」にあって政治や国家制度と無関係である。彼はこう述べる、——普通、この〔新たな理念＝同胞体〕反対者が言うように、新経済理論〔ウトピストの言う社会主義的経済理論〕がはまだ十分に科学によって定式化を受けていないという点に〔新しい秩序の導入の〕障害があるわけではない。……別の人が言うように、一般に新原理は否応なくあれこれの国家的諸形式を要求し、それらの中の何かと敵対するものであって、いかほどこの如き仮説〔ウトピー〕が蔓延しようとするものと全くの錯誤というものだ、という点に困難があるわけではない。農業も重軽工業も、商業もすべての経済的力も、<sup>アソシエーション</sup>協同組合の原理も、その本質からして政治的かたよりに無縁である、国家制度のいかなる形態とも同じように調子を合せることができるのである。アレクサンドルⅡ世と彼の側近、プロシア王、無制限君主、イギリス王、立憲君主、その兄弟、ケッツキー公爵、イギリスの貴族諸大臣……北アメリカ民主黨員——皆、同じようにロバート・オ

ウエンを励げましたのである。事の本質上、協働組合の原理は全然政治的なものに関係しない、むしろ純粋に経済的なものに関係する、と(傍点 引用者)。このようにチェルヌィシェフスキーは新たな理念の実現の難易、同じことだが新秩序の導入の難易を政治制度や国家制度に求めず、「純粋に経済的」慣行に求めたため、私的所有の慣行の支配した西欧は「何世紀もの苦難の試煉」でしか、その実現や導入は可能でないと断じたのである。無論、ここには彼の政治と経済との関係の認識の甘さがあり、それが「慣行」重視へとつながったのであることは論をまつまでもない。

西欧の私的所有の慣行が新秩序導入の大障碍であるとしたのに対して、彼は、今度は、ロシアの土地の共同体的所有の慣行を新秩序実現の原動力として重視した、否、過大視した、否、過大評価したのである。彼の見地によれば、イギリス人やフランス人にとって至難の業と見える慣行がロシアにおいては人民生活の事実として存在するのである、指摘するまでもなくこれはオブシチナ **община** である。彼のオブシチナ観の詳細は統論に譲るが、この時点で把握されていたその特徴は、構成員における私的所有権の欠如、土地の共同体的所有と耕作、成員間の協同、友愛であった。西欧諸国と違ってロシアは何世紀にもわたって農業国家として存続してきたし、今後もロシア人口の圧倒的多数は農民として農業経済生産に従事することは必定である、とすれば私的所有権の発達によって西欧ではとうの昔に消滅してしまった慣行がロシアの自由主義経済学者の言うようにロシアの発展の障り物であるどころか、逆にそれを廃棄せず残存させておいて協同組合の原理に供すべきである——これがチェルヌィシェフスキーの農村共同体擁護の結論である。この結論の導出に、当時のロシアが長い封建制から抜けてやっとな近代ブルジョワ社会へ向いつつある、というそれ自体正しい彼の歴史認識が作用していた。クリミア戦争後の移行期にあって二つの前途、つまり二つの路線が想定されていた、一つは『経済指標』誌の唱導するロシアの西欧型資本主義によるロシアの近代化であり、他は『現代人』誌の提唱する農村共同体を母体と



した同胞体社会の実現によるロシアの近代化である。この二つの路線は移行期のロシアにあって当然想定される可能な路線であった。チェルヌィシエフスキーが後者の選択肢を選んだ論理はこうである。歴史の発展の第一期は共同体の時期であり、続く第二期は私的所有のそれであり、当面迎えている第三期は高次元における共同体への復帰である。ロシアは移行期にあって第二期に向い出しているが、もし完全に第二期に突入するならば、西欧資本主義の二の舞いを踏み、「絶えず拡大しているプロレタリアートの潰瘍」を産み出す破目に陥らなければならない。しかしロシアの経済発展は急速であるので、この第二期の期間は比較的短いであろう。彼は言う、——もし短い期間とするなら、〔第三期を迎える〕復活の苦難の過程を回避するために共同体秩序を破壊しないで置いて短い期間の不便をなめた方が、より有益であろう、と。彼はこの期間を30年ぐらいと踏んだ、そして共同体秩序を完全に取り払って私的所有に移ってしまえば、再び共同体の所有に復帰するためには「何世紀もの苦難な試煉」を要すると断じたのである。よってロシアが、商業的および産業的企業心の覚醒によって、また鉄道の敷設、船舶会社の創立によって、つまり著しい急速な経済活動によって旧来の家父長制的経済生活を変貌させることは必至だが、しかし、オブシチナに敢えて手をつけてはいけないという至上命令が下る。この論理に、更にチェルヌィシエフスキーの下層勤労者大衆一般へのヒューマニズム観が作用している。彼によればオブシチナはロシア人の生活の貧弱さをつくりだしているに違いないが、しかし、それでもこれはプロレタリアート根絶のための「聖なる救済手段」にして「善 *благо*」であり、前者の生活の貧弱さを「償って余りある」世にも希有なる廃棄すべきでない歴史の「唯一の貴重な遺産」なのである。こうして彼の農民社会主義は誕生した。ここで誕生の力学とその思想史的意義を明らかにしておこう。

彼の農民社会主義の生年月日はその本質と不可分の関係にある。1857年初頭とはクリミヤ戦争の惨敗の翌年、1861年の農奴解放の時点からみれば四年

前、封建的な農奴＝地主経済から西欧型ブルジョワ経済への「移行期」であり、ロシアの改革＝自由主義者はセイ、パスチアの *laissez faire, laissez passer* の理論を借りて「上からの」除々なる解放＝改革によるロシアの西欧化の喧伝を開始し、1861年の解放を到着目標としていた。ところが西欧諸国ではこの目標は数世紀前に達成され、ブルジョワ社会は資本主義の確立を通過してすでに資本と労働の敵対による社会的諸矛盾を白日の下に曝してフリーエ、オウエンらの空想社会主義および1848年の社会主義によって批判済みであった。チェルヌィシェフスキーは既に学生時代1848～49年の西欧事情に通じ、勤労者一般の利益の擁護の立場から西欧資本主義およびその経済のすぐれた批判者になっていた、そしてプロレタリアートと貧困の根絶のためには死をも辞さないラジカルな社会主義者になっていた。1856年頃からハクストハウゼンの刺激によってロシア共同体論争が華々しく論壇を賑ぎやかさせた上、この問題をめぐって二つの路線が形成され始めていた、片や解体論、片や残存・保持論である。後者にはスラヴ主義者も入ったが意図するところは前ピョートルの古代ロシア、ギリシア正教的共同体であったので、ロシア近代化の深刻な問題提起からそれた。革命的民主主義者チェルヌィシェフスキーは、急速に成長している「移行期」のロシアの経済活動が放置されればそのまま西欧型資本主義に進み、農村「プロレタリアートの潰瘍」が不可避であると見てとったので、オプシチナを、その精神を、その潰瘍の「解毒剤」ないし「救済手段」になしうるものとして共同体保持論に廻ったのである。彼は言う、——ありとあらゆる改善の無尽蔵の、永遠に生き生きとした新鮮な土壌は、我国ロシアの共同体的所有である、国民的福祉と国家的開花の無尽蔵な蓄えはそこにある、と。ロシア思想史を振り返るなら、革新的思想家のオプシチナへの着眼はペトラシエフスキー会のメンバーに始まる、彼らは、ロシアのオプシチナをフリーエのファランステールに模したが、それは非常に直観的でこれを未来社会の経済的関係の地盤として理論的に組立てたものではなかった。これをめぐってロシアの近代化を深刻に思慮するまで

にロシアの社会はいまだ進展していなかったからである。ゲルツェンは確かに〈ロシア社会主義〉の生みの親であるが、皮肉なことに生み落したところがロシアなる大地の上においてでなく「向う岸」(西欧)においてであった。彼の社会主義は、チェルヌィシエフスキーの社会主義の誕生の力学とかなり異なり、1848～49年の革命の一連の敗北による西欧への幻滅が起因となって既にクリミア戦争開始前の1849～51年の時点でロシアを革命の聖地にオープンチナを掲げるところにして誕生している。チェルヌィシエフスキーの農民社会主義の誕生にゲルツェンの〈ロシア社会主義〉が何らかの形で影響しているのではないかと考えられるが、この根拠は非常に薄い。というのは、ゲルツェンが往時のデカプリストの雑誌『北極星』をロンドンの自由出版局で1855年から不定期年鑑として再刊し、ロシアに持込ませてロシアの知的貴族に呼びかけているが、チェルヌィシエフスキーはこれを当時読んでいる形跡はない。更にかの有名な亡命機関誌『鐘』<sup>ココル</sup>月刊誌が1857年6月1日から発刊されて、これもまたロシアに持込まれて出廻るが、既にチェルヌィシエフスキーの社会主義の誕生後のことである。ゲルツェンがフランス語やドイツ語で西欧で出版したものについて触れたものは、チェルヌィシエフスキーの日記に見当らないし、彼のいくつかの論著にもゲルツェンの影は認めにくい。したがってチェルヌィシエフスキーの農民社会主義の誕生にはゲルツェンの〈ロシア社会主義〉の直接の影響はないと見て大過あるまい。

チェルヌィシエフスキーの社会主義はゲルツェンのそれよりも、ロシアの現実的動きにとって非常にアクチュアルな形で誕生している、一口で言えば、数年後に切迫した土地なしの解放、土地から解放した人格的解放に対するアンチテーゼとして提唱されたものである。チェルヌィシエフスキーの提唱した一年ほど前のアレクサンドルⅡ世の演説を考え合せるなら、チェルヌィシエフスキーの社会主義の誕生のダイナミックな力は明確となる。新皇帝はクリミア戦争終結(1856年3月18日)直後の20日に地方貴族を前にしてこう演説した、——朕が農民に自由を与えたいがごとき風聞が立っている。こ

れは正しくない、諸君はこのことをすべての人に根も葉もないことだと言っ  
 てもよい。しかしながら、不幸なことに農民と地主の間には敵愾心がある  
 ことだ、しかもいままでにこのことから地主に対する不服従のケースがいく  
 つかあった。早晩我国がこのこと〔解放〕に手をつけねばなるまいというの  
 が朕の確信である。かくなる以上、諸君は朕と同一の意見とおぼすが、朕は  
 これが下からよりも上から起る方が遙かによいのだと思う、と。アレクサン  
 ドルⅡ世の内務次官 A. II. レフシンは同じ年の夏に「上から」の改革プログ  
 ラムを作った、その内容は農奴法の廃止を行うが貴族の法的・経済的特権護  
 持、土地なし農民の回避、農奴に市民権を与えるが地主の監督下におく、領  
 地の貴族的の所有承認、農民に分与地を利用させるが納税義務完遂、土地所有  
 者に労働力を保証するため農民を一定の屋敷に定住させて放浪化を防ぐ、と  
 いったものであった。しかしこの改革案は貴族の全面的賛同が得られなかつ  
 た。そこで1857年1月3日にアレクサンドルⅡ世は A. Ф. オルロフ、M. H.  
 ムラヴィヨフ、П. П. ガガリン公の如き反動主義者をメンバーに入れて「特  
 別秘密委員会」を設置して、改革に反対する大貴族、人格的に解放して土地  
 を農民に与えない大土地所有者、資本主義の様式に踏み切ってブルジョワ的  
 志向を強める貴族＝地主層、そして農民大衆の諸利害の対立を調整すべく指  
 令した。1857年初頭において4年後の農奴解放は既定の事実であった。この  
 時点でチェルヌィシェフスキーの農民社会主義は誕生したのである。ゲルツ  
 ユンの〈ロシア社会主義〉も、チェルヌィシェフスキーの農民社会主義も、  
 同じくロシアのオプシチナに農村プロレタリアートを防ぐ救済手段を求めて  
 いるが、後者のそれは当初から「上から」の農奴解放を下からの革命によつ  
 て打破する意図をもつラジカルな性格をもっていた。もし彼の社会主義が解  
 放後に同じような形で誕生したとするなら、その意義はもっとナロードニキ  
 的であり、その評価はもっと低くなるであろう。チェルヌィシェフスキーの  
 社会主義の社会主義たる所以は農奴解放前夜にあるのであって解放後にある  
 のではない。彼の第三期 (1857～1862) の現実的なアクチュアルな活動はま

さしくこの期のものであった。

さてここで決して言いおとすことができないことは、彼が農民社会主義を提唱した際、ただ単に声高に下層階級の大眾の利害を擁護したのではなく、ベンサム「最大多数の最大幸福」の原理でその社会主義を理論的に裏打ちしているという事実である。一見ベンサムの功利論がロシアの社会主義に作用しているということには奇異な感じを抱くであろう、が、しかし、彼の社会主義の構造と決して功利論はアンバランスではないのである。以下この点を論及しよう。

同じ論壇評で、共同体的所有が私的所有におけるよりも生産性が低くとも生産物の配分の点からみれば、共同体的所有下における人民大眾の幸福の度合は、私的所有下におけるそれよりも大いであるという論法を、チェルヌィシエフスキーは自由主義経済学者に対して明示した。以下は彼の仮定的算法の主旨である。今、5000デシャチナの面積の土地があって2000人居住している場合、土地の私的所有の社会と共同体的所有の社会の2つ社会を考える。前者にあって1デシャチナ当り20ルーブリ、後者にあって12ルーブリの収益がえられるものとする。勿論、この場合私的所有形態の社会の生産性は共同体的所有の社会よりも大である。私的所有の社会は三つの階層に分化しているので、5ルーブリは地代に、6ルーブリは労働賃金に、残り9ルーブリは農場経営者に配分される。共同体的所有の社会にあっては階層は存在しないから12ルーブリ全部が共同体家族の収益となる。当然のことながら、私的所有の社会の総収益は $5000 \times 20 = 100,000$ ルーブリ、共同体的社会のそれは $5000 \times 12 = 60,000$ ルーブリとなる。総収益においても前者が後者より大であることは一目瞭然である。しかし、そこに居住する住民人口大眾にとっての利益、収益はどうであろうか。今、1家族を5人とすれば両社会の家族数は共に $2000 \div 5 = 400$ 家族となる。私的所有の社会にあっては、地主1家族は $5 \times 5000 = 25,000$ ルーブリの地代を得る、30家族の農場経営者は $9 \times$



5000 = 45,000 ルーブリあるいは1家族あたり1,500 ルーブリを得る, 残る農業労働者は $400 - 31 = 369$ 家族であり, 得る収益は $6 \times 5000 = 30,000$ ルーブリあるいは1家族当たり $81 \cdot 25$ ルーブリである。これに反して共同体的所有の社会にあっては生産の三要素に基づく階層がないので400家族全体が得るものは $12 \times 5000 = 60,000$ ルーブリであり, 1家族当たり150ルーブリとなる。よってこの両社会の農業労働者の1家族当りの収益比は81.25対150となり, 共同体所有の社会の労働者は私的所有の社会のそれよりも約2倍弱の収益をもつことになる。故に結論として共同体的所有の社会が私的所有の社会におけるよりも生産性が低くとも人民大衆がうける利益は前者の方が大となる。

彼のこの仮定的算法は, 後年『「ミル経済学原理」露訳および評言』(1861—61)のなかで「仮定的方法 Гипотетический метод」と名命されている。この方法のもつ長所と欠点の評価については追って論及することにして, ここで急いで指摘しなければならないことはこの方法には明らかに「最大多数の最大幸福」というベンサム功利の原理が貫ぬかれていることである。共同体的所有の社会にあっては個々人の収益(幸福)の総和は社会全体の収益と同じになり, 最大多数者(この場合では2000人全部)が平等に収益をうることになる, それに反して私的所有の社会にあっては155人の少数者が全体の収益の約 $2/3$ を占めてしまい, 残る1845人の手にする収益は1人当たり, 農業経営者と比べても約 $1/20$ になってしまう。この場合少数者の最大幸福ではあっても最大多数の幸福でないのでベンサムの原理に背反する。以上のことから判るように, チェルヌィシエフスキーは分配論にベンサムの功利の原理を応用し, よって国富の増大よりも勤労階級の利害擁護に廻ったのである。現に, 彼は『資本と労働』(1860)のなかで, この共産主義的平等的分配論はベンサムに負うものであることをはっきりと明記している。

イギリスが産んだ功利主義思想の確立者にして法典編纂者ジェレミー・ベンサム(1748~1832)とロシアとのつながりは深い。時の女帝エカテリーナII世に法典編纂の依頼をうけて, ベンサムは1785年から1788年までの丁

度フランス革命勃発直前にロシアの各地を旅行した。彼はフランス大革命の年に『政府論断片』(1776)の処女作につづいて『道徳および立法の諸原理序説』を世に公けにした。彼の直弟子のフランス人デュモン Dumont (1759~1829)は師の主要論文を仏訳して“*Traité de Législation civile et pénale*” 3 vols として1802年パリで刊行した。これは世界各国に色々な反響を示したが、中でもロシアの皇帝アレクサンドル I 世はただちにこのデュモン編の仏訳を勅令でもって露訳させた。それは1805年『民法および刑法についての考察』なる表題の3巻となって最初の1巻が聖ペテルブルグに出現した。完訳完結したのは1811年である。そののちデュモンは1809年に皇帝の依頼をうけてベンサムに続いて法典編纂を再度行なった。しかしベンサムの法典編纂の仕事とロシア皇帝のつながりが強かった反面、ベンサムの著作は50年代初頭までロシアの先進的インテリゲンチヤに知られずにいた。ペトランシエフスキー会の共同文庫にベンサムの全集があったが会員は功利思想の影響を受けていない、そして更に、ベンサムはベリンスキー、ゲルツェン、オガリョフらに何らの影も落していないのである。

ベンサムの著作が露訳されて半世紀も経過しようとしていた時の1857年に、チェルヌィシエフスキーはこの露訳に書評を加えたのである。この時点でベンサムの主著『道徳および立法の諸原理序説』(1789)を取り上げ好意的な書評を加えたことは、チェルヌィシエフスキーがいかに彼の思想を重視したかを示すと同時に、ロシアの近代化にとってこの思想が大きな役割を演ずるものと見たことをも示している。功利の原理は彼の農民社会主義の誕生において一定の役割をもつのみならず、その後の彼の色々な部門において、例えば唯物論的人間学、勤労者の経済学、功利的歴史観の中に、ラジカルに焼直されて活かされている。1860年にベンサムの“*Principles of Judicial Procedure*” (1827)が露訳された際にも(露訳『裁判制度について』)、彼は立法家としてのベンサムを好意的に評価して、相当の引用でもってロシアのインテリゲンチヤに直接紹介している。

チュルヌィシエフスキーがベンサム著作に親しんだ時点は実証的に詳らかにしにくい、学生時代に読んだ節は見当らない。ただ彼が1854年にA. リヴォフの『富の要素としての土地について』(1853)に書評を下した時、「仮定的方法」を用いてセイ、パスチアの俗流経済学者を論難して、かれらをリカードとスミスの古典経済学者から区別したところから推して、恐らくこの頃とみて大過ない。この頃から彼はいくつかの論著で **благосостояние** [благо 善, 幸福, 益, состояние 事物の状態] というカテゴリーを頻りに用いているが、これは明らかにベンサムの happiness, felicity の訳語に相当するものである。ベンサムは、周知の如く、utility (功利) とは benefit, advantage, pleasure, good, happiness 等をうみだす事物の性質のことであるとしているので、**благосостояние** なるロシア語はほぼこれに近いのである。筆者はこのロシア語に、主観的ニュアンスの強い日本語の「幸福」という語よりもかなり客観的実在性を帯びた「福祉」という語を当てることにしよう。というのは、チュルヌィシエフスキーは、統論で詳述するように、バプストの『人民資本を増大させる若干の諸条件について』(1857)の書評で、資本を物質的資本 **материальный капитал** (土地, 建造物, 貨幣, 生産物等々) と道徳的資本 **нравственный капитал** (知識の成熟度, 勤労愛, 誠実, 節檢, 慎重さ, 道徳的規範, 遵奉精神, 精力的活動, 思惟, 企業欲等々) の総体としてこれを二分することに反対し、これを人民資本 **народный капитал** と名付け、かつそれを国民的福祉 **национальное благосостояние** なる語で言い換えているからである。

ここで彼がベンサムの功利の原理をどのように受容し、それをラジカルに変容させたかを見よう。ベンサムは第一に人間各個人の感性的快樂(快)と不快(苦)を善悪の道徳的価値判定の絶対的基準に仕立て、それを論証や検証不用の数学的公理にも匹敵させた、それがため快や不快は計算にかかる数量的な厳密な表現を要求したのである。例えば  $2 \times 2 = 4$  はいかなる階級の利害や時代の諸条件にも無縁で、普遍妥当性をもつ真理であり、万人の誰

も否定すべくもないものである。ベンサムは政治学や法律学や道徳学において普遍的真理規準をなすものは、個々人の快、不快の数量的極大であると考えていた。チェルヌィシェフスキーもこの点ではベンサムと異ならず、数学的算法は論破の余地ない有力な武器とみており、これを色々な複雑な社会現象の分析に用いているのである。例えば、戦争が国民にとって有益であるか否かの分析や先きに取り上げた私的所有社会と共同体的所有社会の優劣の判定などに算術的手法を用いて「最大多数の最大幸福」の原理に合致するかどうかを調べるのである、その際複雑な多数の要素変数のうち二、三の最も本質的な要素変数に絞って計算を行う。ベンサムは快、不快の主体を現実に生きている諸個人の経験的実体に求めたから、社会全体なる快、不快は仮想的実体としてのみしかあり得ない、よってそれを各個人の幸福の算術的総和に帰着させた (felicific calculus 幸福計算法)。チェルヌィシェフスキーも同じ算法を用いているが、先きに取り上げた例からも判るように、下層勤労者人民大衆の快をあくまで算術的総和にかけるものであって、搾取者の利益を含めてた快一般を拒否している。この点で「最大多数の最大幸福」の公理の適用範囲は、階級社会にあっては常に働く勤労人民に限られているのである。例えば、戦争が善か悪かは労働者の立場から判定される、今ある国の人口が5000人で、そのうち勤労者が1000の男子とすると、1人の勤労者は5人を養うことになる。もし200人の男子がかりに戦争にかりだされると1人の勤労者は6.25人を養うことになり、生活は以前より苦しくなる、よって戦争は決して勤労人民にとって益とはならないから悪であると裁定される。このように功利の原理はラジカルに変容をうけ、常に勤労人民の快の総和の極大化に用いられたのである。これが特に分配論に適用されると共産主義的平等主義にいきつくことになる。一国の富の最良の分配は最大多数者に社会の富を配分することになるから、社会の富の総体を人口数で割った平均値に近いものを1人当り得ることが理想となる。しかし、地主、農場経営者がいる場合、その取り分が大きいため勤労者はその平均値に近づけないのである。先

きに取り上げた私的所有社会の場合では、平均値は  $100,000 \div 2000 = 50$  ルーブリであるが、勤労者1人当りの取り分は16.25ルーブリである。その差は非常に大きい。逆に言えば、勤労者1人当りの取り分が平均値に近づくためには、つまり最大の幸福を極大化するためには、地主と農場経営者は無用の長物なのである。よって分配論からみた理想の社会とは、すなわちベンサム「最大多数の最大幸福」の原理に合致した社会とは、つまり地主が同時に農場経営者にして農民であるという結論に至る。チェルヌィシェフスキーの「土地所有者=勤労者=受益者」なるカテゴリーは、ベンサムの功利の原理の貫徹でもあったわけである。ここに労働と資本の分裂のない社会が論理的に推論されたわけである。したがって、チェルヌィシェフスキーにとってはロシアのオプシチナはベンサムの功利の原理の貫徹とも映じたのである。

ベンサムは政治体制として王制、制限君主制、民主制を考え、王制は王個人の利益のみに限られ、そして制限君主制は少数の貴族の利益に限られるから「最大多数の最大幸福」の公理に反するとみ、それに対して一般大衆が議会を通じて政治に参加する代議的民主政治こそこの公理に一番よく合致するものと考えた。チェルヌィシェフスキーはベンサムの適正な立法による市民制度の確立は個人と労働の安全を保証する意味で、それなりに評価しているが、むしろ彼は功利の原理を政治制度に適用するよりは経済制度に貫徹させているのである。既述した如く、法的権利は経済の物質的生活が保証されない限り、彼の考えによれば、空文にも等しかったから。ベンサムはフランス革命を歴史の一大進歩とみるところかむしろ「進歩の一時的停止」とみて、革命時代の自法然に依拠する権利請願を軽視し、適正に法を立て議会規則を正しく運用することによって、また無記名投票をもちこんだ選挙法改正や婦人参政権拡大等によって、つまり議会中心主義によって国民全体の幸福を追求することに努力した。この点で、ベンサムの全著作は賢明ならびに中庸の精神で貫ぬかれている、とチェルヌィシェフスキーに評された。彼は後年、ベンサムは単なるデモクラットで必要に応じて革命的であり、時には非革命的で



あったと評している場合、革命的とは「最大多数の最大幸福」のことを、非革命的とは議会中心の改良主義のことを指してのことと見ても大過ない。確かに、ベンサム<sup>1</sup>の功利の原理は、好意的な史家が指摘するように「哲学的急進主義」であった、この点をチェルヌィシエフスキーは彼なりにラジカルに変容して彼の社会主義の理論的構造に組み込んだのである。したがって1857年に彼が農民社会主義を提唱した時、彼がただフーリエやオウエンの思想とロシアのオプシチナを単にダブラせたのではなかった。もっと哲学的な内的理論構造をもっていたわけである。まず指摘しなければならないが、ロバート・オウエンはチェルヌィシエフスキーに甚大な影響を与えたものではないにしろ、彼自身は『新社会観』(1813)や『ラナーク州への報告』(1821)の中で協同組合の構想を立てていた際に彼が指導原理にしたものはベンサムの功利論であった。チェルヌィシエフスキーが終生私淑したフォイエルバッハ<sup>2</sup>の自然主義の哲学は文字通りフランス感覚論哲学のもっていた感性と利己<sup>エゴ</sup>の復権であった。ベンサムの思想系譜を遡って行けばプリーストリ、ヒューム、エルヴェシウス、ドルバックとなる。学生時代彼はエルヴェシウスの『精神論』を読んでいた。彼が学生時代大きく魅了されたフーリエの情念の哲学もまたフランスの感覚論哲学に淵源をもつものである。ベンサム、フーリエ、オウエンの底流にある哲学はフォイエルバッハの哲学に典型的に表現されたものと、概して、同趣であったのである。彼が『ロシア文学のゴゴリ時代概要』(1856)のなかで示した自愛 **самолюбие** なる観念つまり悟性と愛の影響下で高尚な目的を己れに選定するという観念は、フォイエルバッハの理性的エゴイズム——自らの本質を愛する自己愛、自己の理性に適合した人間の自己貫徹——と、ベンサムの自愛心 **self-love** ——自利を快とする——との融合であるとしても間違いないであろう。というのはベンサムにあっては悟性ないし理性は感性に対して支配権をもっていないから無制限な私利私欲の追求に走るブルジョワ的利己主義<sup>エゴイズム</sup>につらなり、*laissez faire, laissez passer* に至る面をもっている、それに引き換え、フォイエルバッハの理性

的エゴは自らの人間的本質を愛する自己愛的人間のエゴであって、つきつめれば人間のあり方をなしている *Gemeinwesen* への愛、つまり人間的類の本質への愛、共同体への愛ということになる。フォイエルバッハは社会主義をエゴによって哲学的に基礎づけた最初の人であることを忘れてはならない。しかしフォイエルバッハには哲学的共産主義はあってもフーリエやオウエンの如き未来社会の見取図はなかった。チェルヌィシエフスキーは理性に裏打ちされた自愛と「最大多数の最大幸福」の公理とを見事に緬い合せて、共産主義理論を理論的にも提示し得たのである。ベンサム功利の原理は彼の農民社会主義にとって決して違和的なアンバランスなものでない。爾来、ソヴェトの哲学史家はベンサムのチェルヌィシエフスキーへの影響を度外視して来ているが、これは敢えて彼の社会主義の理論構造を破壊するものであろう。これがため彼の社会主義の「空想性」が納得の行くまで理論的に説明がつかぬうちに、その「空想性」をロシアの「後進性」で直接説明するという手取り早い手法をとる結果になるのである。

概して、チェルヌィシエフスキーの思想活動期を通じて彼の思想に抜きがたい大きな影を落した西欧諸国の思想家をかいつまんでみるなら、ドイツではフォイエルバッハ、フランスではルイ=ブラン、フーリエ、ギゾーとすれば、イギリスではまことにベンサムであったのである。彼はベンサムの名についてはあまり触れていないが、しかしこのことは功利の原理を受容していないことを意味するものではない、むしろそれは経済学、人間学、歴史学、社会評論等にくまなくとりいれられた上、ラジカルに消化されて血となり肉となっているといった方が適わしい。彼はベンサムの功利の原理に対して批判らしい批判を加えていないのは注目に価しよう、というのはもし批判を下すなら我が身を切る自己批判につながったであろうから、彼のベンサムに拠る功利的歴史哲学と階級闘争を歴史の推進力と考える彼の史観とのアンチノミーについては追って論及しよう。

ついでにイギリスの他の思想家にたいするチェルヌィシエフスキーの態度

を述べておくと、ロバート・オウエンはフーリエやサン＝シモンと同類の協同組合の構想者にして実験家として考えられているが、フーリエほどの影響力をもたなかった。また既述したイギリスの歴史家マコーリーの『ヤコフⅡ世、ウイヘルムⅢ世とアン女王治下におけるイギリス史物語』の露訳に手を出しているが、途中で仕事を他人に譲っている。これは外国史のロシアの読者への紹介にすぎない。また J・S・ミルの大著『経済学原理』を完訳しているが、これも当時セイ、バスタアの俗流経済学がロシアに支配的であったので、J・S・ミルのこの著作を彼らに比べてまともとみたからである。当時のロシアに適当な経済学の入門書が欠けていたので、彼は「勤労者の理論」の立場からこの露訳にかなりの評言を各章にわたって付してミルの経済学を焼直した。同じ経済学者の手になる『功利主義』(1861)は、チェルヌィシエフスキーの農民社会主義の誕生が1857年だから時間的にみて無関係である。ミルは決してチェルヌィシエフスキーの思想開眼者になっていない。こうみるとベンサムの彼に与えた影響は誠に大としても決して過大視とはならないであろう。

チェルヌィシエフスキーの農民社会主義の誕生に当って残る論及点は彼の農村共同体観とその功利の原理との内的関係である。

＝つづく＝

#### 使用テキスト

Н. Г. Чернышевский : Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939~1953.  
Государственное издательство художественной литературы, Москва.